

ゆるやかに支え合える地域をつくる

「コミュニティカフェ」「スペースナナ」連続講座開催

年齢、性別、障害のあるなし、これらに関わらず、誰もが安心して立ち寄れる居場所を作りたい。その思いから開かれたスペースナナ(横浜市青葉区)は、地域の方々によるさまざまな交流でにぎわっています。

貸出スペースでのイベントやナナ食堂などの活動の一つとして

「地域でゆるやかに支え合う場をつくろう」と題した連続講座の開催があります。1年を通じて、いろいろな分野で活躍する方々からお話を聞き、支え合える地域づくりを目指していくもので、今年で7年目を数える活動です。9月23日は、本講座の第5回目が開催され、「発達障害のあるひとと共に、暮らす・働く」をテーマにした講演会には、テーマに関心のある方やスペースナナをよく利用する方が参加しました。

この日は、マザーズジャケットの河村哉子さん、吉田朋子さん、中畝治子さんがゲストとして登壇。マザーズジャケットは障害のある子どもたちの母親たちのグループ

で、3人からそれぞれの子育ての

思い出や体験が語られました。悩む日々の中で、我が子と共に育っていた家族や友達たちの生き生きとした様子、そうしたつながりから得た発見など、どこまでも前向きで元気なお話に、会場の参加者は聞き入っていました。



講演で、会場は和やかな雰囲気です。河村さん、お話を話すのは、笑顔で包まれる場面も体験されています。

講演後は参加者同士の意見交換と、ゲストへの質問コーナーが行われました。同じ悩みを持つ母親たちから子どもの将来を案ずる相談や、子どもと関わる仕事に就く人からの疑問など、さまざまな分野、視点から積極的な意見交換が行われました。

立場やハンドレの垣根を越えて言葉を交わし合う風景は、支え合える地域の力を感ぜさせました。

(企画調整・情報提供担当)

認知症の人と家族への理解を広める

「世界アルツハイマーデー」かながわ開催

認知症の代表的な原因疾患の一つであるアルツハイマー病。平成6年、国際アルツハイマー病協会が世界保健機関と共同で、毎年9月21日を「世界アルツハイマーデー」に、9月を「世界アルツハイマー月間」に定めています。

各地で官民による啓発活動が行われる中、9月21日、県主催の「世界アルツハイマーデー」かながわイベント」が新都市プラザ(横浜市西区・そごう横浜店前)で開催。認知症の人と支える人によるハートフルライブやメッセージ、DVDの上映等による、県内各地の認知症の人にやさしい地域づくりの取り組みの紹介等を通して、広く県民へ認知症の理解を呼びかけました。

さらに、共催の「世界アルツハイマーデー普及啓発イベント実行委員会(チーム・オレンジ9・21)」有志は、オレンジ色のたすきをかけて雨の中、横浜エリアを疾走。認知症への理解を促すチラシを配布しながら、さわやかに横浜の街を駆け抜けました。

(企画調整・情報提供担当)

服部誠さん (RUN伴(とも)+ (プラス) 三浦半島実行委員会)

9. 21オレンジランニング、終始雨のコンディションでしたが、啓発の旗とチラシをもって横浜の街を楽しく17.5km走ってきました。

コースは、そごう横浜店前→みなとみらい→赤レンガ倉庫→山下公園→中華街→横浜スタジアム→桜木町駅→横浜市社協→ランドマークプラザ→横浜美術館→神奈川県社会福祉会館(神奈川県社協)→かながわ県民センター(神奈川県社協)→そごう横浜店前でした。

立ち寄った先でたくさんの応援をいただきました。街行く人にチラシをお渡しし、エールもいただきました。中華街で休憩し、肉まんもみんなでお食べられて満足です！急な企画に集まってくれた皆さま、応援してくださった皆さま、本当にありがとうございました。

多くの人に知ってもらうため、みんなでつながる一日。皆さんに知ってほしいことを広げること、私たちができることを、色々な方法で、これからも続けていきます。



福祉のうごき

2018年8月26日～9月25日

Movement of welfare

●**県内年齢別人口「老年」、「年少」の2倍**
 県は31日、今年1月1日現在の県内の年齢別人口統計を発表した。1976年の統計開始以降初めて、老年人口(65歳以上)が年少人口(0～14歳)の2倍に達し、少子高齢化の傾向が一層鮮明になった。

●**横浜市、空き室活用で要配慮者へ家賃補助**
 横浜市は、賃貸住宅への入居を断られやすい低所得者や高齢者、外国人、障害者ら住宅確保要配慮者を対象に、空き室などを活用した家賃補助事業を今秋から始め、月額最大4万円を補助する。家賃補助は県内で初めて。

●**17年度の児童虐待相談対応が最多13万件**
 子どもの心を言葉や行動で傷つける「心理的虐待」が、2017年度までの5年間で3倍に増え、同年度の虐待の総件数の半数を超えたことが厚生労働省の調査で分かった。特に子どもの前で親が配偶者に暴力を振るう「面前DV」を、警察が心理的虐待の一つと位置づけ、児童相談所に通告する例の増加が背景にある。

●**厚生労働省、身元保証サービスの手引き作成**
 入院時の身元保証や死後の遺品整理といった民間の高齢者サポートサービスを巡り、厚生労働省は利用の際の注意点や相談窓口などをまとめた手引きを作成した。意に沿わない契約や金銭トラブルを回避するのに役立ててもらおうのが狙い。

●**県がインクルーシブ教育実践校を拡充へ**
 知的障害がある生徒が通常の学級で学ぶ「インクルーシブ教育」の拡充に向け、県教育委員会は13日、新たに県立高校十数校を実践推進校に指定する方針を明らかにした。

子どもの生活と声を知る〜鶴見から始めよう〜

―(特非)サードプレイス講演会開催

18歳未満の子どもの相対的貧困率は13・8%(平成27年)で7人に1人。国では「子どもの貧困対策の推進に関する法律」(平成25年公布)によるさまざまな対策が行われていますが、ひとり親世帯の貧困率は特に高い状況です。

9月24日、横浜市鶴見区で子どもへの貧困に対し効果的な対策を実践できる地域づくりを目指した講演会が開催。民生委員児童委員、町内会関係者、不登校の子どもの支援者など多数の参加がありました。基調講演では、(公財)あすのば

の代表理事である小河光治さんより、1500人アンケート調査に基づく「子どもの生活と声」について報告がありました。

アンケートは、あすのばの「入学・新生活応援給付金」利用者を対象に実施。86%が年収300万円未満の厳しい生活状況でありながら、就学援助や高校給付金の利用が6割止まりであること。また、保護者の子ども時代ひとり親・両親のいない世帯が18%などの状況が把握されました。

この結果から、子どもの貧困の

連鎖、必要とする人に情報が届きにくいことなどが見えてきます。

また、あすのばの学生スタッフは「ひとり親家庭で育ち、その生活が当たり前で苦しいとは思わなかった。でも、あすのばとの出会いで自分が貧困の当事者と分かった」と発言。子どもの貧困が見えにくい理由がうかがえます。「声を上げられない子もいることを忘れず、日常の子どもの声を拾ってほしい」とメッセージがありました。

子どもの貧困への取り組み、社会全体で子ども・若者を育てること、そのあり方について、より深く考えるきっかけとなりました。

(企画調整・情報提供担当)

やさしさのおくりもの



(地域福祉推進担当)

参加した方からは、「楽しいトークが盛りだくさんのクラシックコンサートで、心癒されるひとときでした」と話してくれました。素敵なヴァイオリンの音色がいつまでも心に残り、訪れた人を魅了していました。

石油の日チャリティーコンサート 神奈川県石油業協同組合

神奈川県石油業協同組合では、10月6日を「石油の日」と定めPR活動を実施しています。その一環として平成12年よりフジテレビアナウンサーの軽部真一さんとヴァイオリニストの高嶋ちさ子さんの「プロデュースによる「めざましクラシックス」」をお招きし、「石油の日チャリティーコンサート」を開催しています。

10月6日は昭和48年10月6日に発生し、日本の経済と生活を大きく混乱させた第1次オイルショック。この苦しい経験を忘れず石油を大切に使うため「石油の日」が設定されました。

コンサートには本会登録の交通遺児世帯を中心に「招待いただき、また収益の一部を交通遺児援護基金にご寄附いただいています。19年目を迎えた今年のコンサートではスペシャルゲストにイルカさん、ゲストアーティストに南里沙さんを迎え、軽部さんと高嶋さんの軽妙なかけあいと趣向を凝らした演出で、多くの方に素晴らしい演奏と歌声が届けられました。参加した方からは、「楽しいトークが盛りだくさんのクラシックコンサートで、心癒されるひとときでした」と話してくれました。